

# 戦争体験談(富山大空襲)

おおうらかずこ  
大浦員子さん

今年は戦後 70 年という年、私が今ここにいて、生涯で忘れることのできない富山大空襲についてお話したいと思います。

第 2 次世界大戦は、私が小学 5 年生の 12 月に始まりました。ハワイに真珠湾攻撃を行い、「日本は勝つんだ！バンザーイ！」と祝賀ムードに包まれていましたので、幼い私はまさか日本が負けることになろうとは、思いもしませんでした。食料や生活用品などがどんどん無くなっていきましたが、“勝つまでは欲しがりません”とみんな我慢していました。

当時、富山の駅前にはアメリカのルーズベルト大統領とイギリスのチャーチル首相の顔の絵が描いてあって、子どもたちはやっつけてやろう！とその絵を踏みに行って、戦争ムードへと引き込まれていきました。今考えるとなんてばかげたことをしていたんだろうと思います。

女学校にあがって、2 年生の時、サイパン島に敵が上陸し、日本が不利になったと知りました。その頃は、敵が来たら竹やりでやっつけてやると思っていましたし、もし爆弾が落とされたら、防火そうからバケツに水を汲んで、リレーをして消そうと思っていました。今と違って、昔は隣近所の絆がすごい深く、「となり組」といって近所の人たちは結束し、つながりは大変強いものでした。みんなで一致団結協力し合って、戦争に打ち勝つんだと意欲を高めていました。

いよいよ戦争が激しくなり、富山でも空襲警報がでるようになってきました。空襲警報は、8 秒間なって 4 秒止まり、また 8 秒間なるのを 10 回くら

い繰り返すサイレン。それが「敵機が来たぞ！」という合図です。空襲警報がなると家の電気を消して見つからないように真っ暗にし、じっと待って、解除の警報がなると電気をつけるという生活を1年ほど続けました。それでも、不思議なことに当時は日本が負けるとは思わなかったです。

戦争が激しくなってくると、学校の講堂にシンガーミシンが何十台もおかれました。かばんを教室に置いたまま講堂に集まって、ずら一つと積まれた軍服をひたすら縫いました。脇縫いなら脇縫い、ひざ当てならひざ当て、とにかく流れ作業で、休む間もなく縫い続け、勉強はしたくても授業は全く行われませんでした。そんな中、空襲警報がなったら、袋に重さ約6キロのミシンの頭を入れ、学校の防空壕へ逃げるということを4ヶ月くらい続けました。

空襲は日ごと激しくなり、いよいよ8月1日の夜、11時頃に空襲警報がなり、裏の空き地の防空壕へ逃げました。母は1年前に病気で亡くなっており、父は北日本新聞社に勤めていて、その日は夜勤だったため、家には姉と私の2人きりでした。

しばらくして、空襲解除になり敵機もいなくなったので、みんな安心して家に入りました。ところが、40分も経たないうちに、またもや空襲警報！私の家は松川沿いにありましたが、防空壕に入るか入らないくらいに富山駅の方が真っ赤になっています。川向うだから大丈夫だろうと思っていたら、すぐ近くの日赤病院の方も炎があがり、こちらに迫ってきました。

これは大変！早く逃げなきゃと思い、姉と手をつないで逃げようとしたとたん「逃げるなー！」と向かいの家のご主人にどなられ、怖くなって、また防空壕に戻りました。そうは言っても、どんどん火が近づいてくるし、こ

れは逃げないと死んでしまうと慌てて靴をはいたまま座敷に置いてあった母の位牌を持って、姉と一緒に必死で逃げました。その頃は、みんな毛布をかぶって逃げる人でいっぱい。どこへ逃げたらいいのか…。

とにかく線路を越えて、奥田方向へ行こうと思いました。でもそこには、真っ黒な長い貨物列車が止まっていて道をふさいでいました。意を決して、いつ急に動き出すかわからない機関車の下を腹這いになって、やっとくぐり抜け、また姉としっかり手をつないで逃げました。走っていると今度は空のから目の前にザザーッと雨が降るような音とともに無数の焼夷弾が降ってくるのです。思わず身を守るため、姉と手を放し、弾をよけました。今でも時々夢をみるほど恐ろしかったです。

弾をよけながら、なんとか赤江川にたどり着きました。水深は浅く、水の中に浸かることはありませんでしたが、向こう岸は火の海。電柱が火の柱となって燃えていてパシャッと音をたてて折れたとたんに川へ倒れ、そのたびに火の粉が飛び散ってくる。姉と2人、慌てて防空頭巾に燃え移らないよう、どろどろの川水をバケツですくって、頭からかぶり難を逃れることができました。赤江川には人間だけではなく、牛や馬などの動物もみんな逃げている、人の叫び声や牛や馬の鳴き声、それは壮絶な光景でした。

早くおさまると心で祈りながら、明け方2時半頃まで長い長い爆撃の時間が過ぎ、静かに朝を迎えました。

家に戻ると、驚いたことに私の家は跡形もなくなっていて茫然としました。庭石と家の土台のコンクリートにひびが入って残っているだけ。そこに父が立っていました。父は、本当に被害のひどい神通川に逃げており、周りではたくさんの方が亡くなっていたようです。家はなくなってしまったけれど、

3人無事でよかったと心から喜び合いました。

改めて家があった場所を見てみると、37発も焼夷弾が落ちていました。裏の松川べりは、3mおきに爆撃されており、町は本当に“焼けつくされた”という言葉以外ありませんでした。

戦争が終わって、随分経ってから調べて分かったことですが、市街地の99.5%も焼き尽くすような凄まじい空襲が富山に起こったのかというと、いくつかの要因が重なっていたからです。ひとつには、その日がアメリカの陸軍航空記念日だったため、派手に日本へ爆撃をして記念日を祝おうということがありました。ひとつには、1度空襲警報を解除して、安心しているところに、また空襲警報があり、油断してしまったこと。一番、問題に思っていることは、当時、逃げることは非国民で、逃げずに消火活動せよと厳しく指導されていたということ。富山に空襲が起こる前に、アメリカの飛行機が「近いうちに富山に空襲を行う」といったビラを4~5千枚ほど撒いていたにも関わらず、軍や警察が集めて一般の人の目につかないようにしていたそうです。このようなことが重なり、類をみない被害が及びました。私の友達も、体に3発も焼夷弾を受けて亡くなった人がおり、このように幸せな未来があるとも知らず、若くして亡くなったことを考えると本当に残念でなりません。

こんな経験をした私ですが、なぜか周囲の人にその話はしづらく、長年口を閉ざしていました。話せるようになったのは、つい10年ほど前からです。戦後60年のときに富山を空爆した80歳くらいのアメリカ人が富山へやってきて、自分の家族を空襲で亡くした人に謝罪されました。その時に初めて、戦争は日本だけではなく、相手も一生忘れる事ができないくらい辛かったのだと気づくことができました。戦争とは、憎しみ合わなくてもいい人達まで

が憎しみ合ってしまう。殺されないために相手を殺してしまう。夢と未来がある大切な命がたくさんこの戦争で奪われたことを重く受け止め、二度とこのようなことがないように絶対にしてはいけない。

これからもずっと平和で日本人としての優しく堅実な人柄で、世界に認められているそんな日本のままであってほしいと心から願っています。